

その日、風紀委員長さまの睡眠を妨害した罪には書庫掃除と整理という罰が下された。

ちよつとくらしいの関係の変化がもたらしてくれるものはなく、雲雀恭弥も曰く、鬼ではないからお仕置きは選ばせてあげるとのこと、そこにある程度の譲歩があったとしても、あー絶対に気分ですよね、それ。と疑いもなく沢田綱吉は思ったから咬み殺されない方で！と即答、相手の言葉を遮るように力強く言つたものだから人の話を聞けとばかりに一発ごつと額に入つた。

「……」

書庫は本が置いてある場所だから明かり取り程度の窓があるだけでほとんど光も差さず、外は晴れているのにうそ寒くなるような暗さだった。点けた電灯も一本がちかちかと点滅している。ツナは片手でドアを開けると本を抱えてよちよちと入っていく。入つてすぐに段ボールに入った筒状の凶らしきもの、図書カードと書かれた段ボールが机の上と下に置いてある、身体を横にしないと通れない。部屋は実験室横の準備室並みの狭さで、木製の本棚がふらつきそうな危うさを保ちながら本と埃を乗せていた。雲雀が書庫というからってつきり図書室のかと思つたが違つていて、本でも整理しきれないものが寄せ集められるようにしてこの狭い室内を埋めているようだ、保管場所という言葉がしっくりくる感じがする。何しろ図書室

よりも応接室に近い。ていうか、無造作な置かれ方といい、この感じは何となく裏帳簿とか隠れていそうな気がしてならない。校庭に（死ぬ気で）穴を掘つて呼びされたときも押収したという裏帳簿（とやら）を詰まらなそうな顔で眺めていたし。

——がたつ！

「わっ！」

足下にコードが引っかかつてあつと思つたときには既に遅く、ツナは本を抱えたまま本棚に正面衝突していた。

「い、つて……」鼻血出そう。

顔を押しさえてじんとする痛みを堪えているとぐらりと気配が動き、はつと手を伸ばしたけど、遅かった。本棚はまんまドミノ状態に「ごんごん」と前のめりに壁側に倒れていった。

「……」やっちゃつた。やっちゃつたけど学校設備なのになんでこんな脆い設置なの？

埃が舞い上がり、咽せた、棚にあった段ボールから本から何から全てが落下している、壮大ともいえる光景に言葉を失い、どうにもならず乾いた笑いを垂れ流した。咬み殺されるの決定。

「あーもう……」埃を払い、呻きともつかない息を吐きながら散乱した本を拾う。

「沢田綱吉」

うわあ、来た。おそるおそる振り向くとドアに雲雀が仁王立ちに立っている。誰が散らかせと言つたというげりげりしたオーラを垂れ流しつつ、何割かは呆れてもいそうだった。

「す、すみませんっ！ 足が引つかかって、倒す気なんてさらさら
なかつたんですけど…」

「当たり前だよ」倒す目的で立てるのは高層建築物とドミノくらい
なものだ。

雲雀は室内を一瞥すると足下にある一冊を拾い上げた。無事を確
認しているのちらりと中身を見る、学校図書には不似合いなほど
にその本は綴じ方といい古かった、ツナはそれをなにげなく見なが
らうっかり相槌を打つてしまいそうになる。

「ですよ…」相手があまりにもすらりと言ったものだから。

「ね？」高層建築物？

いや、建物は違うだろ。雲雀の言葉が冗談なのか本気なのかツナ
にはわかりかねる。

「うん。で、沢田。君は咬み殺されてから片付けるのと、片付けて
から咬み殺されて、弁償するのとどっちがいい？」

「…っ」どっちも嫌です！ ていうかより後者嫌！

後者さる、じつとりと嫌な汗をかき。雲雀は古い本をいつの間に
か手放して両手にしつかりトンファーを握っている。どうしよ
う、こんなところで逃げ場がないよ。

「え、いや、でも！ その、ここにあるのは随分古そうな本もある
ので、暴れるとしても狭いし、オレが弁償とか出来そうもないもの
とかもありそうですし！」寧ろそれが大半だと思う。

そうだね、と雲雀は答える、狩ること決定の獲物を前にして声が
ちよっと嬉しそうだった。

「並盛に残っている古い書物を手に入れたんだ。符牒は使ってい
けど贈収賄の記録もあるらしく、役に立つかと思つてね」だから君
に頼んだのだけだ。

「うえええ」なにやらすんだ、そんな知らずにも触れたくな
い。

雲雀はそこでトンファーを振るうのではなく、ふと思ひ出した
ように前屈みに俯くとひよいと捨てていたらしい先刻の本を手にし
た。

「昭和元年四月…？」

「…？」

飛んでくるだろうその衝撃がなく、身構えていたツナは固まった
ままそつと雲雀を見上げる。心臓はまだドキドキしていて落ち着か
ない。

「大正だ」

「ヒバリさん…」よく分からないけど助かった？

つい、と目の前に本の頁が突き出される、いきなりだったからか
ばちつと何かが弾けたような気がして瞬きをした。見ればなんてこ
とない黄ばんだ紙だ、読んでみるというこらしい。

「えつと、しょう、昭和元年、四月五日…は、春にあう？ …並盛に、
はえせんの花…」

受け取つて顔を近づけた。微びたような湿ったものの異臭は独特
で、微かに墨の匂いもしたがすぐにとんだ。くらつと来たのはこの
せいだっただのか。広げられた面には毛筆らしい誰かの筆跡で、右上

から下に向かつてカナ交じりの読みにくい楷書が綴られていた。

雲雀はじっとツナを見てからぐりぐりと頭を撫でる、読めて撫でられるってなんなのか。あわあわとまた固まっていると相手は黙ったま本を閉じた。

「偽造か」表面はまったく無表情だが、吐き捨てるように呟く声には僅かな怒りが見えた。

「はっ、すみません！」

発作的に直立し、謝ってしまう。苛ついたように雲雀はツナを見返すと、顔にでも書いてある字を読むかのように淡々と言った。

「一九二六年は大正十五年、昭和元年の四月など存在しない」

「はあ…」

「なぜなら、その年の十二月二十四日に大正が終わったからだよ。

昭和元年は一九二六年十二月二十五日からのほんの数日ということになっている。したがって一九二七年は昭和二年。手記や日記ならの類なら尚更だ、次の元号が何かも、いつになるかも知っているはずがない」

「えっ」そうだったのか。

持ち上げて表紙を見話めた。どうしてこんなのがあって、そもそも何のために作れたものなのかツナには皆目分らない。

「へー…」

雲雀は人差し指で庶うように胸に持った本をとんと突いてこれは、と続ける。

「そもそもいまとは字体も違うはずだし、八十年も前の個人の記録

を君が読めること自体おかしい」

「……」

咬み殺し甲斐があるとか戦って楽しいとかそういうのも悲しいけど、出来ないこと前提という自分のダメ具合に関する期待というのもやるせない。

「気付きなよ、それは元号という暦のシステムを理解しない人間が作った偽文書だ」

責めているわけではないんだろうけど、なんだこの仕打ち…。

「あんま触るんじゃねーぞ」

飄々とした声が落ちてくる。

「リボーン」

やっちゃったうえに甘いどころかきつちり辛い委員長様に——期待しているわけではないもの——軽く凹んでもいる、のろりと鈍くツナはリボーンを見た。雲雀は突然の訪問者に驚きもせずやあ、赤ん坊と普通に挨拶をする。

「それは『アンダーアーカイブ』だな」

「は？」

「初代が日本に帰化してからの記録だ」

リボーンはとんと柵から降りると程よく日差しを受けている机の上に立った。ぶらぶらと回るとびたりと足を止める、座ろうと思っただところを座るには埃がありすぎたらしい。

「記録？」

「防備録みてーなもんだな、江戸末期だか明治初期からだと聞い

ちやいるが、手習いに書き留めたのが始まりらしい。量に違いはあるが全員が名前くらいは入れているはずだぞ」

改めて表紙を見直す、和綴じの古い本にしか見えない。この中に祖父や高祖父などの記憶が書き込まれているのか、筆者の名もなく俄には信じがたかったが、かといって嘘だろの一言で終われないような気がした。案外に運だけかも知れないが、大事なものだから残されたと考えるもおかしくはない。焼かれず、捨てられず残されていた頑丈さに雲雀も着目した部分もあるだろう。

「日付がデタラメなものもそうだな、符牒を使うんだろう。違って見えて当たり前だ」暗号化されているからな。

イヤ待て、なんでここにそんなのがあるんだ。

「……」

雲雀は何を考えているのか、それとも興味がないのか黙ったままにいる。

「まずリングに反応するはずだ。コード解説には条件が必要で……」

聞いてもないのに続けようとするのを待ってくれ、と慌てて止める。

「だから、なんで学校にあるんだよ」

「…おおかた家光だろーな」うまいとこ隠しやがる。

家庭教師はさらっと言う、しかもなんだその感心ぶり。

「親父〜！」

そんな曰くつきみたいなものを学校に持ち込ませるな！ どうか なったらどうするんだ。

「ねえ」

「え」

反射的に振り返る、たいていはそれが発言されると同時に武器は落とされていることが多いのだが、出番はないようだった。続けて声が聞こえる、光ってるけど、それ。

——きん。

鋭く甲高い音がした。

大きくはないのに、高く響いて、それこそ真っ直ぐに天を突くかのようだった。

頭が扱られるように耳を塞いで身体を丸める、体内運動の音を探るかのように息を詰めて、そうして音と振動が抜けていくのを待った。そんなには時間はかかってないように思えた。

拍動を、感じる。鼓動が伝わってくる。

呼吸が、聞こえる。

どこか。

ここではない、どこかへ。

呼吸はいつしか荒くなって、神経も尖っていた。

どうして誰もいないんだろう。

人か、獣か、唸りが聞こえる。

じりと気配が動いて、いまにも喉元めがけて突進してくるようなそんな殺気がちりちりと肌を刺す。

目を開く、暗い、黒ずんだ赤い点、土の匂い、かび臭さの中にぬめった、なまものの匂いが、した。

「…あつ…はあ、はあ、はあ…」

息を整え、刀を握り直す。汗か血か、濡れて柄が手から離れそう
だ。

けどまだ敵はいる。

夜明けは遠く、自分はまだ死ねない。

——ガキンツ

鏢迫り合いが繰り返され、どさりと鈍い音と共に影が倒れる。自分
は闇に向かって青眼から刀を振り下ろしたところで、肩に絶命し

たものの、その重みを受けていた。

——がたつ…
「…よし」

はつと振り向くと背後にあったらしい人影がずりりと崩れ、倒れる。倒れたその手にあった刀が転がってがしやりと音を立てた。誰かの気配が近づく、落ちた刀を拾い、露を払うが上手く握れていないのがわかる。両手でなんとか構えを取るが、腰に力が入らずガタガタと鏢鳴りを繰り返すばかりで息も浅く短くなる一方だ。

古い一軒家だった、いつしかうち捨てられてしまったような佇まいで、柱や土間に生活の影を僅かに残しており、蜘蛛の巣が下がっている煙窓にも煤がこびりついている。破れた護符は変色していて、襖やら柱にいくつも重ねて貼り付けられてあった。人型の形をしたものに何かが書いてあるのがかるうじて見えた。壁にも護符らしきものはあり、煤と埃ですっかり黒ずみ、取り付けられた鉤は錆が浮いていた。真つ直ぐに倒された襖と腰高障子があり、囲炉裏が切つてある座敷が見渡せた。

灰汁の中に浸かっているような息苦しさがまとわりついている。城に入ってから連れ出され、探し出されては戻るの繰り返しだった。そういう三年、これからもそんなふうに生きていくのだと漠然と感じていたが思い違いだった。そんなの甘ったれた妄想に過ぎない。

「……」

息を詰めてそつと手の間隔を空けていく、じつとりと伝わるもの

が汗か血糊なのかわからない。

綱吉は追っ手から逃げていた、死にたくないと何度も思つて、どうしてこんなことになるのかと、連れ出されることに甘んじていた。報いなのかと自問し続けていた。関八州をうろうろと半月も逃げまどつていれば疲労も溜まつてくる。油断もあった、この家は化生が出るとして変わつていった家主を始め、在の者はおろか江戸を追われた破落戸や雲助の類いさえ近付かないらしい。そう聞かされて自分は力を抜いた、そこへ待ち構えたように告げられた冷酷な言葉は自分を打ちのめす、二人の小姓の命はほぼ絶望的。黒ずんだ引き戸と寄付だけがはつきりと記憶にはある、かさついた木肌の感触、古びた匂い。意識は途絶え、どれほど経つたか分からない。暗がりの中で目を覚ましたとき、犬の低く唸る声を聞いた。

——それが明けない夜のはじまりだった。

「綱吉！」

光だ。乏しいが手元からほのと胸、口元まで見える。腰のものに手を当てつつも手燭を掲げ、濃紺の袴、灰鼠の着物、ああ、この姿は知っていると、安堵する。

「むく、ろ……？」

刀身がゆるゆると下がる。取り巻く強ばりが音を立てて落ちるようだった。

物音に気付いて目を覚ましたとき、自分は寝かされていて、顔を捻れば暗がりにもちろちろと夜気を舐める炎が見えた。隣の座敷の囲炉裏だ、けどそこには誰もいない。火がただひとつの光だった、

外からの月明かりはない。犬だろろうなり声が薄闇のどこかか聞こえていて、目がようよう慣れて障子の枠がなく、向こうの腰高障子も半分になつているのに気付く、誰だろろう、黒いものが蹲つているようだ、焦げた匂いにまじつて鼻を突く異臭がした、どすぐろい液体がどろりとその下からわき出すように流れる。

「ち……？」

丸くて硬そうな駒に似た道具が近くに転がっている。手を伸ばし掛けてはつと引つ込める。張りのある手触り、自分の周囲に見えない糸を張られてあつたのを知る。

弱々しい呻き声と、ものの気配。

ぱちんと薪かが爆ぜた刹那、脳天から光が突き刺さつたような気がした。

「……」

胃臓からこみあがる何かにぐらりと身体が揺れ倒れそうになつたところでまたぱちんと弾け飛ぶ。どこか知れない己の内側にある埋もれ火を熾したように熱くなつていた。

我を失つて、自分は——。

「骸」

刀で身体を支えるようにしながらよろよろと相手に手を差し出すとした。

なんだろろう、これ。何をしていたのだろろう——。

横にころがっているもの、犬を追い詰めた何かはもう動かない。

「平気、か？」

血糊が顔に、粘つて切り髪に着物を、赤く染める。どんよりした色合いに、生臭なおい、相手が近いほどややもやと霞んで目がよく見えない。

「いたのか。無事で、…よかった…」

殺意が真つ向からぶつかってきて、無我夢中だった。倒れ伏しているように見える縁のあれはなんだろう、千種でないといい。

「オレが、…いから、あんなことにまでなつて…」

声すら途切れ、上手く笑えなかった、笑えるはずもない。

「オレのせいだ…」

雲雀は一刹那見えた綱吉の額を見据えた。

仄かに淡いほむらがゆらりと上がったように見えたが、見間違えらしい。埃か何かが光に反射したのだろう。返り血を浴び、おそろく危うい自我を緊張だけで必死に保っている。

「みんな、死んで…」

喘ぐように言つて、息を飲む。

「お前…まで、だったら、つて…無事で、よかった…」

綱吉は慣れない武器を引きずりながらびたびたと血溜まりの上を雲雀めがけて歩き、やがて足下を滑らせ、膝をつくと刀から手をははずし、べたりとその場に座り込む。顔や手にいくつもの切り傷を作つていた、どれも深くはないが赤い線は痛々しい。

「千種と犬は…？ どこ…」

生気のない顔、いまだ争いの興奮が醒めやらないようで寝不足気味の目だけはぎらついている。けどその瞳は物をよくうつしているらしい。いや、見えているが思考が追いつかないのだろう、誰かと勘違いしている。

「……」

「ごめん…」

「綱吉」

頬に手を触れた。やわらかく押し返すのに汗と血に濡れて触つているような気がしない。

「綱吉」

「……」

やわやわした彼にこんな地獄絵図を描こうなど、求めていない。

雁字搦めに守られても、あのころの二の舞には。決して。

「綱吉」

肩口に額を押し当て、抱き締めた。相手は視線をどこか遠くに投げやるようにしたままずっと鼻を吸る。細く殺いだ月に顔を向けたままゆつくりと問う。

「…誰、…？」

どうして。どうして、君が。

「だれ、ですか…」

虚ろな声で。

「どこかへ行きたかった…」だけなのに。

望んではないものだった、とか細く呟いて気を失う。